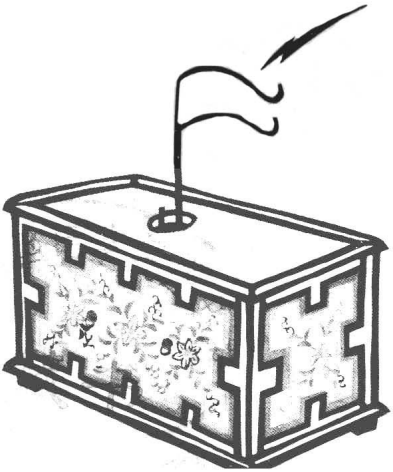
平賀源内

村上元三

平賀源内

村上元三



東京文藝社

平賀源内

平成元年四月二十日　発行
平成元年七月二十日　（二刷）

著作者　村上元三

発行者　角谷かをり

発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一番地
振替・東京六-二一七五七
電話・（二六〇）二五五〇
FAX・（二六〇）七一九八

定価はカバーに表示してあります

無検印承認

ISBN4-8088-3236-4

平賀源内

目次

ギヤマン遊女　五
風来居　三
長崎だんじり　三
元禄小判　四
朝鮮人参　四
渡り鳥　七
長者番附　八
大坂算盤　九
金運女運　一〇
敗亡　一一
芝居茶屋　一六
雨の振袖　一五
五彩の夢　一七
熊の皮　一八
源内勘定　二〇
火鼠の皮　二八
江戸の春　二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

墓の妖術　二四三
物産会　二五五
じゆずねの木　二六〇
のこぎりの音　二九二
めおと草　三〇三
雪見舞　三一四
源内焼　三二七
東都薬品会　三三八
オランダ甲比丹　三四九
天狗貝　三六七
伊豆の秋　三七八
山神　三九〇
金と炭　四〇一
エレキテル　四〇九
風流論　四二二
源内櫛　四三〇

装幀　小宮山逢邦

ギヤマン遊女

だんじり囃子が、廓のざわめきの中をただようようにして、ときどき聞えてくる。風が変つたせいであろうか。その間を縫つて、奉納踊の囃子らしいものが、ふつと聞えては、またやんだ。

ひとりで飲んでいるうちに、明日はこの長崎の諏訪祭の踊奉納という夜、まわりは賑やかなのにその反対に、だんだん風祭藤次郎は気が沈んできた。

頭の中のどこかに、もう一人の藤次郎がいて、しきりに自分をけしかけているように思われてくる。

「殺してしまえよ、千歳を。そしてお前も、旗本の子らしく、腹を切るのだ」

もう一人の藤次郎が、しきりに自分の耳元でささやいている。

「畜生、おれをだましやがつて」

藤次郎は、部屋の隅の衣桁にかけてある、千歳の華やかな襦袢（うちかけ）を睨みつけた。

「ぶち斬つてやる」

思わず藤次郎は、大きな声を出した。

「女郎づれの分才で」

ビロード地に、虎を金糸で縫いとつたその襦袢までが、ひどく癪にさわつてきて、藤次郎は膝を上げ、それを引つぱりおろそうとした。

「痛いつ」

脇差の鍔が、肋にさわつた。

今夜は、この丸山の肥前屋利右衛門の店へあがるとき、大小を預けるのに、そつと藤次郎は脇差だけ袖に隠し、内ぶところへ入れて、千歳の部屋に通つたのであつた。

客の座敷に出ている、といつて千歳は、いない。

禿も部屋から追い出し、藤次郎は、ひとりで酒をのんでいた。

気がついて藤次郎は、内ぶところから脇差を抜き出すと襦袢のうしろへ隠した。

「もう、あいつの口には乗せられるものか」

藤次郎は、ひとり言をいつた。

父親の威光で、部屋住の身が、長崎奉行大橋五左衛門の組下となつて、この土地へ来たのが寛延三年、この宝暦二年で、もう一年の余になる。役目は、役所付というだけで三十俵三人扶持だが、月々、藤次郎は、江戸の父から金を送つて貰つていた。

それが、若い藤次郎には毒になり、丸山通いを覚え、もう八方借金だらけになつていた。

ことし藤次郎は、二十二才になる。

蘭学を学びたい、といつて長崎へ出てきただけに、骨も細く、色が白く、剣術などはろくに知らない。
一本気で正直だつた藤次郎も、この店の千歳となじんでから、ずいぶんよくない事を覚えた。
「おれを、駄目な人間にしやがつて、畜生」
また藤次郎が呟いたとき、廊下を、ぱたんぱたんと近づく足音が聞えた。
千歳に違いない。
裲襠のうしろに隠した脇差のほうへ、ちらりと藤次郎は眼をやつた。
今夜の藤次郎は、わざと目立たぬよう、五枚笹の定紋のついた単衣の着流しであつた。
いそいで坐り直し、藤次郎は、わざと平静をよそおつて酒をのんだ。
今夜は遊女と無理心中をして果てるのか、と思うと、いままで頭のどこからか、さかんに自分をけしかけていたもうひとりの藤次郎は姿を消して、泪が出そうになつてきた。
出島屋敷へ通つて、通詞からオランダ語を学び、また唐人屋敷へも出入りして、通事から言葉を教えられていたのも、もう空に失せてしまう、と考えると、藤次郎は、ぎりつと歯をかんだ。
長崎奉行の大橋五左衛門は、藤次郎の父の下役を勤めていたことがあるので、役所でもあまり骨の折れる仕事は藤次郎へ言いつけぬようにしてくれている。
自分としては恵まれた生活をしていたのに、千歳のせいで、と考えると藤次郎は、障子越しに近づく足音のほうを睨みつけた。
すうつと障子があいて、千歳が、ふらつと入つてきた。
酒に酔つている様子はない。
流し目に藤次郎を見て、千歳は、横ずわりに坐つた。
「こわい顔」
千歳の、ややかすれた声に、はじめは色気がある、と藤次郎は思つていたのだが、今はその声を聞いてさえ、身震いの出るほど腹が立つ。
長崎遊女の服装は、ただ金をかけた、というだけではなく、貿易港だけに舶来品が手に入るので、ビロード、金襴緞子（どんす）などを使つているのが多い。
ことに千歳は、出島屋敷や唐人屋敷へも出入りをする遊女なので、長崎では一口に唐物というオランダ物、唐船が運んできた布などを、ぜいたくに衣裳に使つていた。
面長で、眼鼻立ちは派手だし、肉づきのいい身体なのでことに千歳は、オランダ人や唐人には好かれた。
「こわく見えるか、おれの顔が」
藤次郎は、千歳を睨みつけた。

自分の顔が青くなつているのが、藤次郎にも判る。手が震えて、いきなり眼の前の鉢を千歳に打つけたくなつた。
「なにを怒つておいでじやえ、藤さま」
「お前は、もうおれと別れたい、といつたそうだな」
「そんなこと」
「隠すな。朋輩の者たちから、おれは、からかわれた」
「みなの衆が、藤さまとわたしの仲をねたんで、根も葉もない事をいうているのでございましよう」
「おれはお前のところに、薬種や唐物などを運んでやつた。それでお前は、ずいぶん金儲けをした筈だな」
「そんなこと、改まつて」
ほほほほ、と千歳は、笑い声を立てた。
「なに」
藤次郎は、脇差を隠してある衣桁の褄襠のうしろのほうへちらつと眼をやつた。
いつもとは違う藤次郎の表情から、千歳も、少し不安を感じたようだが、衣桁のうしろに隠してある脇差にまでは気がつかぬ様子であつた。
「世間の人は何をいうか判らぬが、わたしが藤さまを思う気持に変りはありませぬ」
といいながら千歳は、盃をとり、自分で酌をしてのみはじめた。

一べん疑つてみると、藤次郎は、いままで千歳のいつた事、した事、すべてに嘘があり、すつかりだまされていたのだ、という気になつた。
「唐人屋敷や出島から、唐物を外へ持ち出すこと固くご法度、とおぬしも承知だろうな」
自分で愚痴だ、とは思いながら、だんだん怒りがこみ上げてきて、藤次郎の声が震えた。
「それをおれは、いろんな手段で、おぬしに唐物を持ち出させた。それをおぬし、ほかの客に高く売つただけではなく、船大工の何とやら申す奴に、みついでやつていたそうだな」
「阿呆らしい、そんな噂」
千歳は、頭からまともに受けつけていない。
もとは大坂新町の廓（くるわ）の女で、この長崎まで売られてきた、というだけに、客をあしらうすべは、すつかり身につけている。
こんな女に、と思いながら、やはり藤次郎には未練があつた。
「唐物を持ち出させたこと、上役に知れ、おれは今日、きびしく叱りつけられた」
「それは申訳ございませぬなあ」
「お奉行どのも、もうおれをかばつてはくれぬらしい。八

方に借金が出来て、評判を悪くし、このままのめのめと江戸へおれが帰れると思つているのか」
「藤さま」
盃をおいて、千歳は、開き直つた形になつた。
いままで身体中にただよわせていた色気が、すうつと消えて、ひどくよそよそしい態度になつた。
「わたしは遊女でござんす」
「なにつ」
「そうこわい顔したとて、わたしは何とも思うてはいぬぞえ」
「お前は、おれという人間を、台無しにしてくれた」
「それを一々、お客に怒られていたら、遊女などは勤まりませぬ」
「おれが何うしたらいいか、お前に判るか」
「さあ、そこまで心配せねばなりませぬかえ」
「お、おれは」
声が上ずり、藤次郎は、身体中が震えた。
「お前を殺して、おれも腹を切る」
「えつ」
藤次郎は膝を上げ、衣桁にかけた襦袢のうしろから、脇差をつかみ出した。
さつと千歳は立ち上つた。
「な、何をさらすのや」
千歳は、生地をむき出しにし、壁に背をつけて藤次郎を睨んだ。
脇差の柄に手をかけると、藤次郎は、もう物も言えなくなつた。じいんと頭の中がしびれているくせに、夜風を渡つてくるだんじり囃子が、ふつと聞えた。
「動くな。お、お前を」
刀を抜き、藤次郎は、鞘を捨てた。
本気で藤次郎が自分を殺そうとしている、と千歳にも、はつきり判つたようであつた。はじめてその眼に、恐怖がつき上つてきた。
「お、落着いて下さんせ、藤さま」
「殺してやる」
ろくに刀の使い方も知らない藤次郎だし、さつきから飲み続けた酒が身体中によどんで、足も震えている。はじめて人を殺すのだ、と思うと、かあつと頭に血がのぼつたり急に背筋が冷たくなつたりした。
千歳は、じりじりと障子のほうへ近づいている。声を出そうにも藤次郎の血相が険しいので、その余裕もないらしい。
藤次郎は、脇差を平らに構え、柄頭に左手を当てた。一気に千歳を突き殺す積りだつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おのれ」
震えながら藤次郎が、一足踏み出したとき、千歳は、いきなり足の前にあつた台の物を、勢いよく蹴上げた。ちやんと自分で、その間と位置を計つておいたものと見える。
皿や鉢がはね上つて、藤次郎の身体に打つかつた。
思わず藤次郎がたじろいた隙に、千歳は、
「人殺しいつ」
甲高い声を上げ、障子を押し開けて廊下へ飛び出した。
「誰か来てえ。人殺しいつ」
「待て」
追いすがつた藤次郎は、脇差を振りかぶつて斬りつけたが、もう眼の前が暗くなつたようで、刃は鴨居に食い込んだ。
ようやくそれを引き抜き、廊下へ出たころ、千歳は、二間くらい先を走つている。
「人殺しいつ」
千歳の悲鳴が、なおのこと藤次郎を狼狽させた。
ほうぼうの部屋から、客や遊女が廊下へ飛び出してきたが、刀をさげた藤次郎の姿をみると、悲鳴をあげながら逃げまどつた。
「畜生、待て」
藤次郎は、千歳を追いかけたが、千歳は、大段梯子を転げ落ちるようにして、駈けおりていつた。
それと入れかわつて、この肥前屋の店の妓夫たちが二三人、駈け上つてきた。
「風祭様、な、なんばなされますと」
「邪魔だ、どけ」
藤次郎は、刀を振り上げた。
一時は妓夫たちも尻込みしたが、こういうことには慣れている男であろう、ひとりが、壁のほうへ逃げると見せかけて、藤次郎の右から、いきなり手許へ飛びついてきた。
「うぬ」
かわして斬りつける、などということが出来るほど藤次郎は、剣道を学んでいるわけではない。
「なにをする」
刀を振りまわして、対手を追い払つたのが、ようやくのことであつた。
そのころになると、肥前屋の二階も階下も、人の叫び声と足音で、騒々しくなつてきた。
ここの妓夫たちばかりではない、ほかの店の若い連中だろう、祭浴衣を着た男たちが、手に棒をさげて大段梯子を駈け上つてくる。
こうなると藤次郎には、もう階下へ千歳を追いかけていつて斬る、などということは出来なくなつた。

眼の前が暗くなり、じいんと頭の中がしびれた。酔いも一時にけし飛んでいる。
後悔と恐怖が、つき上つてきた。
逃げることを考えるよりほかはない。遊女屋などで無理心中をやり損ない、妓夫連中に捕えられたりしては、父の名が出る、と藤次郎は気がついた。
「畜生」
めちやめちやに刀を振りまわし、藤次郎は、二階の廊下を奥へ走つた。
客や遊女たちの逃げ廻る姿が、ちらちらと眼に入つた。
裏梯子へ下りるあたりの窓障子があいている。すぐ下に屋根が見え、星もない暗い夜空が拡がつていた。
いきなり誰かが、藤次郎の腰を押えにかかつたが、夢中で振つた刀で、どこかを斬られたのか、ぎやつ、という悲鳴をあげ、手を放した。
振り返つて見る余裕もない。そのまま藤次郎は、窓から屋根へ飛びおりた。
この肥前屋のとなりの遊女屋の屋根が、すぐに続いている。
必死で藤次郎は、その暗い屋根の上を、這うようにして逃げた。
男たちの声が、あとから追つてくる。

何処からか、だんじり囃子が、遠くなつたり近くなつたりして、聞えている。
こうなつたら、腹を切るどころではない。
ともかく、奉行所のそばにある役宅まで逃げるしかないが、この丸山から奉行所のある立山までは、長崎の町を斜めに突つ切らなくてはならなかつた。
絶望して、なるようになれ、とは思つたが、考え直して藤次郎は、懸命に廊の屋根から屋根を伝わつて逃げた。
しかし、屋根の下の道も、いまの騒ぎで駆り出された連中が、
「屋根へ逃げたぞつ」
喚き合つている声が聞える。
石畳の上を駈け廻る足音が、だんだん激しくなつて、
「屋根へあがれ」
「竜吐水を運んで来い、水を打つかけて叩き落せ」
殺気立つた声が、入り乱れている。
だが、風祭藤次郎は、下の道をのぞいて見る勇気などはない。屋根から屋根を伝わつて、なんとかしてこの丸山の廓の外へ逃れようという一心だけであつた。
ずるつ、と何べんも足が屋根をすべつて、藤次郎は転り落ちそうになり、辛うじて踏み耐え、息をはずませながら瓦の上を這つて行つた。

気がつくと、脇差の抜身を、まだ右手に握つている。鞘は千歳の部屋へ捨ててはきたが、刀を捨ててはにげ終すことは出来まい、と思つた。

しかし、刀で自分の身体を傷つけそうなので、気がついて藤次郎は、襦袢の袖を引き千切ると、それで刃を巻いた。

もうここは寄合町に近いあたりで、夜空の向うに黒く見えるのが、大徳寺の森に違いない。

だが、間には道があるし、そこにも追手が廻つているだろう。

しばらく何処かへ身を隠し、人気の薄くなつたのを見てから逃げたほうがいい、と藤次郎は考えた。

見ると、ここは肥前屋からは相当離れた屋根の上なのであろう。

二階に物干台が見え、そこの障子があいている。

うしろの屋根の上に、がやがやと人の追つてくる声が聞えるが、家の蔭になつて自分の姿は見られていない。

そう気がつき、いそいで藤次郎は、物干台へあがつた。

ここは、遊女屋ではなく、家の造りは料理屋らしい。

障子があいていたので、藤次郎は、物干台から二階の廊下へ入つた。

三味線の音や話声が聞えるが、この廊下に人気はない。

眼の前の障子は暗く、しいんとしている。

そつと障子に耳を当てがつてみたが、人気はない様子であつた。

静かに障子をあけ、用心しながら藤次郎は、その部屋へ足を踏み入れた。

あまり広い部屋ではないらしい。

闇に慣れるまで、藤次郎は障子ぎわに立つて、しばらく部屋の中を見廻していた。

屏風が引き廻してある。中に人が臥ているのではないかと思い、藤次郎は、どきつとした。

襦袢の片袖を巻いた抜身を右手に、藤次郎は、息を殺していた。

六畳ほどの部屋で、暗い中に、女の髪油と白粉の匂いがただよつている。

女が臥ているらしい。

あわてて藤次郎が、障子の外へ出ようとしたとき、屏風の中から男の声がした。

「お待ち。誰だえ、お前は」

あわてて藤次郎が、廊下へ逃げ出そうとする背中へ、また男の声がした。

「ただの泥棒とは思えないが、うかつに出ないほうがいいのじゃないか」

自暴も半分手伝つて、藤次郎は、度胸を据えて向き直る

と、また部屋の中へ入つた。
右手にさげた刀から、襦袢の片袖を巻き取り、藤次郎は、後手に障子をしめた。
「大きな声を立てると、おれは何をするか判らぬぞ。しばらくここにかくまつてくれ」
「侍だな、あんたは」
屏風の中から、声の主は、そつと顔を出して見たようだつた。
「いま丸山町のほうで騒ぎがあつたようだが、あれだね」
低いが、声はよく透る。
「まあ、お坐り。話によつては、かくまつてあげないものでもない」
屏風の中で、ごそごそと動く気配がし、ぼうつと微かに明るくなつた。
男が、夜具の上に腹這いになつたまま、煙草を吸いつけたのであつた。
一瞬だが、男の顔が、藤次郎に見えた。
頭は総髪にして、しやれ者がよくやる、根の上つた刷毛先の細い髷で、顔は長い。まだ二十四五であろう。
女とならんで臥ているらしく、脅えている女の声が聞える。
「心配は要らないよ」
男は、なだめるようにそういつて、
「さあ、刃物はそこへ置いて、お坐りなさい」
からかつているのでもなく、おだやかな言葉つきで、藤次郎に声をかけた。
また煙草を吸いつけたと見え、男の顔が、暗い中に浮き上つた。
眉毛が下つて、眼が大きく、鼻は高い。
度胸を決めて、藤次郎は、脇差を手にしたまま、そこにあぐらをかいた。
「女郎を殺し損ねて、逃げてきた者だ。人を呼んで突き出すか」
「若いね、あんたは」
男の声が、笑いを含んでいる。
「行燈をつけてもかまいませんか。お互い、顔を見ないと話にならぬ」
「勝手にしろ」
どうともなれと、藤次郎は思つた。
屏風の中の男が、人を呼ぶような気配が見えたら、斬つてしまおう、という気であつた。
「大丈夫だよ。おふく。灯をおつけ」
男が、屏風の中で女にいつた。
やがて、煙草盆の中の火を、付木に移したのであろう、

火が揺れて、枕許の丸行燈に灯が入つた。
急に眼の前が明るくなり、藤次郎は、立上つて逃げ出したくなつた。
「さあ、起きようか」
男が半身を起して、屏風をずらせた。
わざわざ灯を入れて、人に見せるような図ではない。
芸者のほうは恥しそうにしているが、男は、平気であつた。
「暑いな」
起き直つてから、男は、枕許の手拭で顔を拭き、改めて藤次郎を見た。
芸者は、あわてて屏風の蔭へ入り、着物を着はじめたらしい。
「まあ、おちついておいでなさい」
と男は、夜具の上に長襦袢一枚で坐ると、ふつと微笑を浮べて、
「思いつめてそういう事をなすつたのだろうが、軽はずみな真似をして、これからの一生を棒に振つては詰りませんよ」
若いくせに、へんに老成ぶつた物の言い方をした。
むつとして藤次郎は、対手を睨みつけていた。
侍とも医者とも、儒者ともつかぬ感じで、言葉に西国の訛りがある。おしやれだと見えて、夏物の長襦袢も、凝つた物であつた。
「ご安心下さい。わたしは、うろんな者ではない」
と男は、また煙管に煙草をつめながら、
「平賀源内と申します。讃岐の松平様の家来で、長崎へ勉強に来ている者だが、あなたのお顔は、唐人屋敷でも一度か二度お見かけしたことがあるようだ。お奉行所にお勤めではございませんか」
「知つているのか、おれを」
あぐらを掻いていた片膝を立て、藤次郎は、刀を取り直した。
平賀源内という名も、はじめて聞くものだし、自分を知つているとすれば油断は出来ない、と考えたからであつた。
「まあ、刀をお置きなさい。女が、こわがつています」
と源内がいつたのは、度胸がいいからだとは思えないし藤次郎の出ようでは、自分も立上つて逃げ出しそうに思える。
「お顔だけは見かけた、と申しているのだ。お名は知りませんが、お旗本のご子息とは違いますか」
源内に訊かれて、藤次郎は度胸を据えると、
「風祭藤次郎と申して、いかにも旗本の子だ。おれを、何うする」

「だから、かくまつて上げよう、と言うているでしよう」
「おれは女郎を殺し損ねて、追われている身だぞ」
「わたしにお任せなさい」
といつてから源内は、屏風の蔭へ声をかけた。
「おふく、おれの着物をくれ」
「あい」
帯をしめる気配がしていたが、芸者の白い手が見えて、畳んである着物と帯を差し出した。
「失礼します」
立上つて源内は、ゆつくりと着物を着はじめた。
讃岐の松平家の家来だといつたが、しやれた夏物を着て紗の羽織を引つかけたところは、どうしても侍とは見えない。
手足も細く、武芸などはやつたことがないようであつた。
「こちらへおいでなさい」
この平賀源内という男は、芸者と一緒に臥ているところを人に見られても、一向に照れてはいないらしい。
屏風を出てくると、源内は、
「少し開けましよう」
窓障子を細目に開け、外を見ていたが、
「大丈夫です。追手は、ほかを探しているらしい」
枕許の煙草盆を引きよせ、源内は坐りながら、まだ藤次郎が手から放さぬ脇差を、ちらりと見た。
「お腰の物は、それだけか」
「大刀は、肥前屋へ置いてきた」
「由緒あるお刀ですか」
「親父に貰つてきた刀は、売つてしまつた。なまくらゆえ惜しくはない」
「そこまで遊女にのぼせるとは」
「なに」
「いやいや、あなたをからかつているのではありませぬ」
よほど煙草好きらしく、立て続けに煙管へ煙草を詰めながら、源内は、改めて藤次郎の顔を見直した。
「遊女などと申すものは、見かけはギヤマンの器のように美しいが、へたに扱うと、こちらが手に怪我を致します」
「ふん」
藤次郎は、また改めて襦袢の袖で、脇差の刀身を巻きながら、
「おれをかくまつてくれる、と申したな」
「そうお急ぎにならずともよい」
こんどは、ひどく冷たく見える表情で答えてから、源内は、屏風の中へ声をかけた。
「おふく、出て来いよ」
「あい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com